

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

甲斐における治水体制の一考察：武田時代から近世前期への推移

著者	安達 満
出版者	法政大学史学会
雑誌名	法政史学
巻	29
ページ	49-58
発行年	1977-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10114/10248

甲斐における治水体制の一考察

——武田時代から近世前期への推移——

安 達 満

甲斐の国中平野の開発は慶長の古高帳と宝暦六年の三郡村高帳から、村高を比較することによって概略を知ることができる。釜無川、笛吹川、荒川に囲まれた、とくに釜無川の出水の影響を強く受けたと思われる地帯についてみると、釜無川の流路沿岸諸村は近世初期以降開発の進行したあとをみるが、その後背地の諸村はほとんど石高の増加を示していない。このことは後背地の村々がすでに近世初頭に開発の頂点に達したことを示しており、開発を支える一定度の治水技術と、技術を創りだした治水体制の存在したことを語っているとみられる。このことについて問うとき、

甲州流と呼ばれる治水技術がいつごろどのようにして体系化されるにいったのか、現段階では明らかにされていないが、武田時代から近世前期にかけて治水工事への動員体制の推移を明らかにすることは一定の意義をもつものと考ええる。それへの試みが本稿の目的である。

一

武田時代の治水体制を知る史料として一般に評価されているも

甲斐における治水体制の一考察（安達）

のとしては、川除場の守護の義務として竜王の河原宿に与えた次の史料がある。

○武田家朱印

於竜王之川除作家令居住ハ棟別役一切可免許者也、仍如件

永禄三庚申八月二日

(1)

「御本丸様書上」によると、「御河除等丈夫に被仰付御河除御奉公之儀昼夜に不限大切に相勤候様にと信玄様被遊御意百姓屋敷并地子諸役共に御免許に被仰付」たという。諸役免許を引替えに指定した村民に平時の堤防管理にあたせらせている。竜王は国中平野を守る重要な川除場であるため、出水時には近郷の人足を動員できる体制をとる。

○武田信玄朱印

八幡 篠原 德行 西条 万歳 石田両郷 高畑 西飯田
大下条 中下条 上条 金竹 牛匂 天狗沢 保坂惣郷
以右之郷中之人足可退当水者也仍如件

亥七月六日

大岱村 団子新居 大久保村 葛蒲沢 長窪村 上今井村

三ツ沢村 宮窪村 柳平村

以右之郷中人足可退当水者也仍如件

亥七月六日

(3)

『竜王村史』は年号を永禄六年とする。永禄六年の竜王川除場の出水にたいして北山筋の諸村に水防の人足を出すよう命じたものである。この水防体制は江戸時代にまで引継がれ、竜王村が治水人足として催促できる慣行となっていた。延享三年寅正月改めとする宝永二年の竜王村明細帳によると、

一、釜無川大水の節は当村名主方より書立相廻し篠原村西八幡德行西条万歳石田両郷高畑西飯田大下条中下条上条金竹牛匂天狗沢保坂惣郷に村々は大俗団子新居大久保葛蒲沢長久保上今井三ツ沢宮久保柳平村々は人足を以当水を防申候右の通り御朱印所持仕候

と、武田時代の制度が生かされて治水にあたっている。

築堤について伝えるものとして次の文書をみる。

従当甲戌正月至丙子十二月諸普請役御免許之条、相当之川除無疎略可相勤、若令無沙汰者可被加御成敗者也

天正二年甲戌

土屋右衛門尉 奉之

正月十一日

朱印

山神郷

(5)

山神郷に天正二年から天正四年の三カ年を費して釜無川に築堤を命じている。竜王村が平時の保守に棟別役の免許を与えられたのたいし、築堤には与えた工期の間諸普請役を免許されている。いわゆる、山神郷は諸普請役を築堤工事で負担している。築

堤工事と堤防の保守は郷村の百姓に郷村負担として負わせていたようである。

出水の場合の馳付け体制は竜王が近郷に催促する権限を与えられている例をみたが、出水による災害復旧の動員体制をみよう。

〇武田家朱印

竜王御河よけ押ながす之由被_レ聞召候間、水下之御家人御印判衆早速罷出人夫をもよほし、彼河よけ相つづき候様に可_二走廻_一者也

六月二十九日

今福和泉守 奉之

竜王御河よけ水下之郷(6)

『竜王村史』は年号を(天正四丙子年)と記す。『山梨県土木建築史』は年曆不明だが、天正中に勝頼が出したものとす。ここにいう水下之郷とはどの地域を指すのか不明であるが、竜王の堤防が流されたので水下の郷村に知行地を持つ御家人や御印判衆に対して人足を集めて復旧工事にあたると指示している。また次の史料は竜王より下流の山神郷の災害復旧を知らせる。

依_二山之神村之水損_一其方手前之人足百姓役之用所普請等、令_二免許_一候、弥川除之儀無_レ油断可_レ有_二再興_一者也仍如件

天正八年辰三月九日

信君花押

河西五郎右衛門殿

窪田兵部右衛門殿

三井右近尉殿

(8)

文書の宛名の三者のうち、三井について『国志』は次のように記している。

三ツ井右近丞山ノ神村里長ノ祖ナリ天正八辰年十二月廿一日ノ朱印一通、同年三月九日穴山信君花押書ニ本村水損ニヨリ役等ヲ免シ且河防ノ事ヲ命ズ河西五郎右衛門、窪田兵部右衛門、三ツ井右近尉ト連名ナリ俱ニ在任ノ士ナルベシ (9)

武田家より所領を安堵された土着の武士や知行地を与えられた在任の武士に、領内の百姓を指導して水害の復旧にあたるよう命じており、このために武田家に負担する百姓役を免許している。二例にみるように、水害の復旧工事には近郷に在任する御家人、印判衆を動員して、当所の郷村農民はもとより私領内の百姓も提供させる機動体制をとったことを知る。

二

武田時代の制度は在地農民に義務付けられたものをみる限り、徳川氏の支配に移っても引継がれている。『国志』に「(天正)十一年四月神祖御巡視アリ御制ヲ定ラル武田国法画一ニシテ交替アル事ナク吏人モ武田旧臣ヲ用ヒラレ本職ニ復スル者多シ」⁽¹⁰⁾と記すのは、次の史料によって首肯できる面をもっている。

○丹沢記録

一、竜王川原宿致居住川除之奉公相勤候之条如信文代諸役被成御免許候就中去辰年被改候屋敷地子是も如前々可有御捨免旨被仰出候者也

甲斐における治水体制の一考察 (安達)

壬午七月廿三日

成瀬吉衛門一斎判

以清齋元松判

竜王河原宿衆中へ参

(11)

徳川氏は竜王が甲斐の最大の水難場であることを察知して、いはやく竜王河原宿に武田時代の川除体制を継承して治水の任務にあたらせている。

ところで、武田時代には治水の現場で指揮をとったのは、その所領や水下の御家人や印判衆であった。印判衆については明らかでないが、柴辻俊六氏は御家人⁽¹²⁾に地頭給人にたいし印判衆は有力農民という把え方をしている。天正十一年四月に家康が甲斐国の支配体制を武田時代の遺制に復したことによって、次の文書は武田時代の制度への結びつきを知る手がかりを得る。

竜王河除之事西郡通道と御左宮神之北之間を本河除之移ニ境を立竹木を能々被仰付可被為植者也、仍如件

未六月十七日

成瀬吉右衛門判

日下兵右衛門判

河野但馬守殿

(13)

天正十一年六月十七日に兩奉行から竜王の河除場に竹木を植えて充分な管理をするように命じている。文書の受取人は河野但馬守であり、河野が竜王河原宿の人足をもって川除場の管理を指揮せよという意味である。河野の任務を明らかにするため、役職について考察してみよう。河野但馬守は武田時代に小人頭を勤めた

一人である。小人頭はまた中間頭ともいい、あるいは筋奉行というのも同一衆のことであった。武田氏没落後の河野は家康の配下に入り、武田家にて支配せし同心四十五人の分先蹤のごとく還補され、十年十二月に遠江国秋葉寺で同僚志村又左衛門等九人とともに起請文を提出した。同十一年四月に甲斐一国の諸務を沙汰すべく仰を受けて九人一紙の証文を与えられた。同十五年に致仕し文禄四年十月武蔵国八王子において死すという。⁽¹⁵⁾同僚の志村又左衛門は武田時代の小人頭の一人であった。彼らは家康の関東移封とともに武八王子に移っていった。さて、筋奉行については『国志』⁽¹⁶⁾によると徳川氏の配下では中間組頭として甲斐の中間三百人を配下に入れ、御陣の間には九筋の御年貢未進方の催促や九筋の地下人足をもって川除の人足奉行を仕ったという。中間三百人について書きあげた「覚書」⁽¹⁷⁾によると、尾張の小巻御陣、信州のあまかふち御陣、小田原寅ノ年御陣へ参加し、「御陣間には甲州九筋の御年貢未進方の御催促をも仕申候或は九筋の地下人足を以川よけ被仰付候時者人足奉行をも数多仕申候事」とみえる。河野等九人が家康から甲斐一国の諸務を沙汰すべく仰を受けたのは筋奉行の役職であった。九人の筋奉行の下に甲州中間三百人を配属させた隊伍を組み、出陣のあいには甲州の地方支配を担当したのである。筋奉行として配下の中間を擁して竜王の河除場の管理を直接指揮したのが河野の任務であった。

竜王の信玄堤が強化されるのはこの時期であろう。信玄堤は四百五十間の石積出しに継いで七百間の石積堤が築かれる。文書の

「本河除之移ニ」とはこの七百間の石積堤の成立と係わるのであろうか。築堤工事に労力を投入したとする時期に堤の成立を考えるのが順当であろう。⁽¹⁸⁾

徳川氏の甲斐再領までの間における領主の対応としては、加藤光泰の施政にみる事ができる。

○加藤光政印書

竜王河除普請之義為其在所精を入就仕居屋敷地子之義従前々如有来遠江守申付之由候間可得其意者也

卯十二月朔日

竜王河原宿衆中

加藤平兵衛尉光政印

(20)

天正十九年に甲州に封を受けた加藤光泰は城代を通じて、竜王河原宿に治水の任務を「従前々如有来」に認めている。徳川氏から加藤氏へさらに浅野氏等を経て再び徳川氏に甲斐の領主が変わるなかで治水体制は継承されている。山ノ神村が水害で村居を移し再建のために免許された役についてみると、

一、本郷皆流ニ付而新居引越候間先国主何連も役等免許候条向後も如前々可有免許候者也

丑五月二六日

桜 安 芸
石 四郎右
小 大 隅
跡 九郎左
山之上郷(21)

徳川氏の甲斐再領までの間において「先国主何連も役等免許」

とみるごとく、治水施策は継承されてきたことを知らされ、さらに徳川氏も「如前々」免許を認めている。山神村は貞享の検地において屋敷地の石盛が六であり他村の十二に対して半分である。

村方に与えた治水の任務と免許の制は武田時代のものが徳川氏へと継がれ、さらに再領まで保持されてきたのである。治水体制の根幹は在地農民に諸役免許の特典を与え、平時から水防義務を負わせつつ奉行・代官による積極的な治水への取り組みがうかがえる。

三

治水技術の発達には水防体制の強化をもたらす。竜王村が北山筋諸村に対して行使できる人足動員体制は信玄堤の水防を目的とした。さらに信玄堤が延長されるにともない水下諸村にも水防体制を強制する。承応三年の出水は西八幡の信玄堤に水下諸村の人足を動員する体制を固めた。

一、甲州中郡筋西八幡村前釜無川押掛ヶ堤少々破損之由如此以前御領私領共水下之郷村四拾六ヶ村人足出之、御普請可仕郷村之目録別紙有之自今以後堤破損之時分者右之通無遅滞人夫可出之者也

承応三年三月十六日

次郎右衛門 印
源左衛門 印

甲斐における治水体制の一考察（安達）

蔵 人 印
豊 後 印
伊 豆 印
右郷村
御領
共
私領 (22)

『国志』はこの文書を「元文元年本州川除仕法御改正以前ノ事ニテ国役普請ノ令ナリ」と解釈している。

国役普請については『明治以前日本土木史』に「一時幕費を以て工事を施行し竣工後其十分の九を所定区域に賦課、起源享保五年鬼怒川支川大谷川及び竹鼻川の修築に当り之を下野国に賦課したるを以て嚆矢とす」とみえる。しかし治水としての国役普請の制度は一国内における制度としては、より古く濃州にみられる。元禄八年の美濃国堤川除普請之事に

一、濃州壱万石以下、私領方堤川除破損之時者、手前普請難量処者公儀へ相願ひ国役御普請被仰付来候、其領分は不及、中水下之分は、高百石ニ付人足百人、水下之外、又は遠所方之分は、或者廿五人、或は三拾人程為_レ出_レ之候由之事 (23)

とみえ、濃州では元禄初期に万石以下の領主は自力で及ばない治水工事は公儀へ申出て国役普請によって施工してきたのである。負担は領内、水下の村々は村高百石に付き人足百人とし、その他のは工事場と村の距離によって査定されたようである。

甲斐における水防体制は、竜王の信玄堤において永禄六年の北山筋諸村に課した人足負担を、以後の水防慣習としている例をみるが、『国志』が承応三年の西八幡の信玄堤の水防体制を国役普請の令とみたのは、文書に老中、勘定奉行等の連署があることによったものであろう。しかし西八幡の信玄堤の水防体制は承応三年の出水を契機として組織されたのではない。すでに西八幡の信玄堤を保守する体制の慣行を「如此以前」に認めたのであり、幕命によって慣行を制度化したのである。西八幡の信玄堤の水防体

制の成立時期は明らかでないが、竜王の信玄堤の水防体制が成立した永禄六年より遅れる。それは、永禄六年に竜王村へ提出する水防人足の村に西八幡村が含まれていることから知れる。竜王村と西八幡村は隣接して位置する。このため信玄堤も近接して築かれる。竜王の信玄堤の下が西八幡の信玄堤となる。この関係にあって竜王の信玄堤に破堤の憂いがある時は西八幡の信玄堤にも危険は迫っているはずである。すなわち、西八幡村は竜王村へ人足を提供する余裕を持ちえないはずと考える。この関係からみれば、竜王の信玄堤成立の頭初には西八幡の信玄堤は築かれていなかったとみられるのである。西八幡の信玄堤への水防体制は前述の竜王の信玄堤が延長されたとみる天正十一年以降に成立したのではなからうか。

水 防 役 負 担 村

郡	筋 村	川除林守役	川除守役	御林守役
巨摩郡	中郡筋	石	石	石
	二日市場村	192,535	298,471	
	西下条村		519,211	
"	大津村			
	北山筋		284,009	
	西八幡村		821,751	
	竜王村		130,422	
	竜王下河原		258,123	
"	竜王新町			
	武川筋			22,605
	芦倉村			
山梨郡	万力筋			825,278
	上万力村			154,803
	八幡北村			260,414
"	室伏村			
	中郡筋			1,200,000
	遠光寺村			
	上ミ村	548,136		
	小曲村			274,489
	西油川村	89,961	212,780	
	増坪村			
	七沢村	128,429		

甲斐の近世における国役普請の負担は、主として川除郡中割金制度という形態をとる。制度の内容は別稿に譲るが、川除郡中割金の負担は平時の水防役を義務付けられた村方は減免されている。水防役を負担する村は宝暦六年「三郡村高帳」によると表のごとくである。川除役を負担するのは竜王信玄堤付近、荒川笛吹川合流点、平等川（笛吹川）濁川の合流点であり、水防林の守役は笛吹川、荒川御勅使川の各河川の要所に設けられている。

四

徳川氏領国初期における川除指導体制は、兩奉行↓筋奉行↓^(中略)地下人足の形態をとった。武田時代も御家人、印判衆を含めながらもほぼ右の指導体制に準じたものであったろう。近世村落の成立によって、農民は名主を中心とした村落共同体の形態をとってそこに参加する。領主の指導下にありながらも、治水対策への主体性を強めていったはずである。「御本丸様書上」⁽²⁷⁾によって、天和元年の釜無川出水に対する竜王村の動きをみると「其節も本村新町の儀者不及申上ルニ新田共ニ人別ニ罷出称こだ、むしろ土俵を置き、尾を掛け、様々かこひ申候得共、難防相見得申ニ付、水下之村々へ名主方より触状相廻し、村々人夫を以防申候」という手続きを経ている。川除守役を負担する竜王村、同新町、同新田（竜王下河原）がまず水防にたずさわり、防ぎきれない場合、竜王村の名主の判断によって、水下の村々へ触状を廻して人夫の徴発を行なっている。「其内ニ御川除奉行様地方御代官様御出、大分之御人足にて」水防に当たったとして、川除奉行や代官が人足催促の判断として陣頭に立っていないことを知る。川除奉行や地方代官の役割としては出水後の復旧活動のなかにみる。すなわち、「然ル処ニ一二之出し前より西八幡村堺迄本瀬御川除へ押付難儀ニ奉存、御川除御奉行様地方御代官様へ書付を以御訴訟申上候へば、御詮義の上、御川除御奉行様御三人御出で御見分の上、竜王村前之義は不_レ及_ニ申上ルニ上高砂村の上にて高岩向ニ大分の出し御川除被_ニ仰付候故河瀬除申候」と、出水による川瀬

甲斐における治水体制の一考察（安達）

の変更で堤防に本瀬が当るのでこれを避けるために代官、奉行の判断と実行が必要となる。竜王村の及ぶことのできない高砂村地内の築堤が要求される。農民は与えられた川除場の保守には努力できても、他地域に及ぶ治水工事にまで独自で施工する力をもたない。治水を体系化させる農民の努力は代官、川除奉行によって実現されるのである。

柳沢時代において出水時に役人の出向く場所は「満水之節ハ釜無川通り竜王村、笛吹川通り差出近津落合西油川上曾根、荒川赤淵飯田新町遠光寺村、釜無川通白井阿原今福鏡中条上今諏訪、右村々江役人指出水為防候」⁽²⁸⁾と水難場とその対応について知らされる。

治水の経費は、村方負担による「川除郡中割金」と領主負担によって支出された。明暦四年の市川上野村の訟訴文に「酉ノ春（正保二年）岩波七郎右衛門様ハ籠人足被下」とみえ、代官岩波七郎右衛門から蛇籠人足賃を支給されたところ。治水経費の運用の実務を握っていたのは代官である。甲府家、柳沢家の時代には川除担当官を置いていた。甲府家は「寛文元_{辛丑}年九月より（中略）徳川左馬頭綱重郷御領国と成（中略）御代官触頭式人並御代官五人、甲府在番此外、御武具奉行、御蔵奉行、同書替奉行、御入用奉行、川除奉行、山奉行、以上八通り御役人在番」とみえ、柳沢時代にも「吉里公入部以来者（中略）穴切、是には川除、方并代官与力足輕」⁽³¹⁾とみえる。川除奉行、川除方の治水担当官を置いて川除体制を確立している。甲府家、柳沢家時代の普請の仕方について少しふれてみよう。

正徳三年に幕府は「普請に付国庫地方負担取締⁽³²⁾」のため次の書付を出している。

一、御料所之堤、川除、井堰、込、樋、橋等、其外在々御普請之場所年々之御入用、是又古来に引合候に其数倍々を増候者、近年に至て御城下之町人、在々の名主、庄屋、并商売人等之類、御普請を受負候に付て、此等之輩或は其地之案内をしらず（中略）自今以後は御普請受負之輩一切に是を停止し（中略）」

普請費用が増加し、かつ普請が粗末になっているのは、請負業者に工事を委ねているからである、として請負業者による工事を禁止している。治水工事に請負業者が出現していることを知らされる。

享保9年現在 川除普請業者一覧

筋	村	氏 名
中 郡 筋	藏 田 村	次郎左衛門
	下 曾 根	左 兵 衛
	落 合 村	左 兵 衛
	今 福 新	右 衛 門
	山 ノ 神	左 衛 門
	白 井 阿	右 衛 門
	花 輪 村	右 衛 門
	今 福 村	右 衛 門
西 郡 筋	鏡 中 条	左 衛 門
	落 合 村	右 衛 門
	春 米 村	左 衛 門
	上 諏 訪	右 衛 門
	下 高 砂	右 衛 門
	藤 田 村	右 衛 門
	上 高 砂	右 衛 門
万 力 筋	河 内 村	右 衛 門
北 山 筋	宇 津 谷	右 衛 門
	千 塚 村	右 衛 門
府 中	緑 町	右 衛 門
	穴 山 町	右 衛 門

甲斐における両家の時代については次によりその一端を知る。
一、釜無川笛吹川富士川塩川金川おも川芦川御勅使川其外小川沢々川除之儀冬中役人見分之上目論見請負申付人足ハ宍人ニ付米五合ツゝ籠考ツニ付米貳合五勺積相渡し其外之竹木年切ニ直段吟味之上相極候三郡割合ニ而取之請負人江相渡居村ニ而請負願候分は願之通申付候村ニ入用金相渡候⁽³³⁾

川除普請は冬中に計画を立て、役人が実地見分をして工事計画書を作成する。工事費は計画書に基づいて規定の費用が支出される。普請は業者請負と居村願請負の二通りがあり、居村で工事を希望しないときは業者請負いでおこなった。享保九年段階で「只今迄川除普請請負来候者共⁽³⁴⁾」として二十一名の請負業者が登録されている。請負業者を筋別に整理すると表のごとくになる。釜無

川の沿岸地帯である西郡・中郡に多くの業者が存在する。柳沢時代の前に甲斐に封を得た甲府家の場合については、甲府町年寄の記録「坂田日記抄⁽³⁵⁾」に次の記述を見る。

辰八月五日

一、先月廿一日満水ニ而川田村平等川橋松本村坊が橋押流候ニ付入札を以掛直し被仰付候朝比奈八郎左衛門殿河野庄兵衛殿へ参目論見帳写取入札認来る九日評定所へ持参候様に町触廻状寛文十三丑年八月廿七日
一、山の神村西南胡村今福新町村川除破損繕普

請入札の儀戸倉小左衛門殿へ参り注文享取九月二日五時前評定所へ入札持参候様に廻状

元禄十五年正月十二日

一、当丑春徳島立石堰破損并蓬沢小曲水門御普請入札を以、請負被仰付候に付川除御奉行衆江参り目論見帳面取入札可致旨
町触

最初の記述は寛文延宝の年号が混入する記録のなかにみる。治水や土木工事を町触や廻状によって知らせ、入札によって業者を定めて請負わせていたことがわかる。甲府・柳沢両家支配下の治水工事は入札による業者請負が中心となっており、かなりの数の請負業者が成立していた。

請負業者の成立は治水工法の一程度の体系的形成を知らせてくれる。甲府、柳沢両家の時代は平時の堤防保守と満水時の対策は農民の手により、普請事業は専門業者の手になる傾向にあったと思われる。普請事業に農民が直接関与しなくなると普請役は金納化の傾向を強めてゆき「川除郡中割金」が治水体制として問われるようになる。

まとめにかえて

享保九年に甲斐国は幕府直轄領となった。幕府は享保改革の一環として新田開発を進めるため治水策を強化する。甲斐も井沢弥惣兵衛を治水の中心指導者とした治水策が施される。『国志』が「元文元年本州川除仕法御改正」とするのは新しい治水体系の導

甲斐における治水体制の一考察（安達）

入によって甲州古来の治水体制に変化のあったことを知らせているのであろう。いずれが古来の川除仕法で、⁽³⁶⁾ どれが改正後のそれであるか現在のところ充分には明らかにされていないが、小稿によって治水体制について解明への端緒が得られれば幸いである。

注

- (1) 『竜王村史』 21頁
- (2) 『近世科学思想・上』岩波書店
- (3) 『竜王村史』 22頁
- (4) 『竜王村史』 29頁
- (5) 『明治以前日本土木史』三井文書
- (6) 『竜王村史』 22頁
- (7) 広瀬広一編『山梨県土木建築史』
- (8) 右同書収録
- (9) 士庶部第八
- (10) 人物部第九
- (11) 『竜王村史』 23頁
- (12) 「戦国期の水利灌漑と開発」『民衆史研究』第11号
- (13) 『竜王村史』 24頁
- (14) 人物部第八
- (15) 『寛政重修諸家譜』巻第一三七五
- (16) 人物部第九
- (17) 『甲斐国志』巻之百十九 附録第一「権現様御代より甲州御中間御奉公申上ル御役儀等並御扶持方御切米之覚書」寛永十九年十月日

(18) 村上直氏紹介「申伝書」(多摩文化 第七号)によると、

武田時代に河野等小人頭は道筋奉行として甲斐九筋の国境守衛に当たっていたようである。

(19) 拙稿「初期『信玄堤』の形態について」(日本歴史第三五五号)また柴辻氏は「注(12)」の論中でユニークな見解を述べている。

(20) 『竜王村史』22頁、村史では年号を天正七年とするが、この文書は武田時代のものではない。差出人の加藤平兵衛尉光政は加藤光泰が天正十九年に甲州に封を受けたときの城代である。遠江守は加藤光泰を指しており天正十九辛卯年の文書である。

(21) 若尾資料「巨摩郡古文書」(山梨県立図書館蔵)『国志』は年号を慶長六年としている。

(22) 前掲「巨摩郡古文書」

(23) 山川部 第一

(24) 原昭午「近世美濃における国役普請について」(歴史学研究第三〇二号)同「幕府法における国役普請制について」(岐阜史学第五七号)は国役普請についての労作である。

(25) 『日本財政経済史料』第九巻上

(26) 『甲州文庫史料』第〇巻

(27) 注(2)

(28) 甲州文庫「甲斐国山梨八代巨摩郡村々堰川除覚」(山梨県立図書館)

『甲府略志』一一二頁の柳沢氏甲州支配下の定には

一、洪水の節郡奉行川除奉行代官第一護指出竜王之堤
下下知郷町之人足并於荒川相川之堤可令防之事

とある。

(29) 太田家文書(山梨県立図書館)

(30) 「甲斐歴代譜」「甲斐叢書」第二巻

(31) 「甲陽柳秘録」右同書 なお注(27)にみるごとく柳沢時代にも川除奉行という名称を用いたようである。

(32) 『日本財政経済史料』第四巻下

(33) 注(27)「三郡村々堰川除覚」

(34) 同前

(35) 『甲斐叢書』第一巻

(36) 古島敏雄氏は注(2)の書の解説で地方書の記述を中心に享保期以後釜無川を連続堤で締切る以前の治水形態を検討されている。

小稿は法政大学大学院日本史学専攻の修士論文『釜無川治水技術の発達と国中平野の開発』の一部を補稿したものであり、指導教授の村上直先生に多くの御指示をいただいたここに記して深謝の意を表します。